

かわすみ家



昔の暮らしを照らし続けた様々な灯りの道具たち

蔵に残る灯火具



特集 / 企画展示

旧河澄家の民具

pick up!

浮世絵展・浮世絵講演

やさしい暮らし 昔にならうー祭礼を通じて現代(いま)を見るー

歴史コラム

日下の町(旧孔舎衛坂駅跡と旧生駒トンネル)

河澄家の自然 蓮の果托でつくる小さな手しごと



家々々々 2025 Sep. vol. 32

東大阪市指定文化財 旧河澄家 ニューズレター

目次

04 特集 旧河澄家の民具

昔の人々の暮らしを支えてきた灯りの道具や様々な民具たち

06 目下の嘶 旧孔舎衛坂駅跡と旧生駒トンネル

旧生駒トンネルの歴史と今後の活用についてのお話

08 イベントレポート

雛祭り茶会&箏曲コンサート

春季ハイキング

古民家で土に触れる おとなの陶芸教室 全6回

端午の節句展

古文書講座 全3回

近畿大学峰滝ゼミ REPORT 端午の節句工作 鯉のぼりけん玉づくり
カマドで炊き込みご飯

10 Pick Up

浮世繪展・浮世繪講演

やさしい暮らし 昔にならう ―祭礼を通じて現代（いま）を見る―

12 イベントカレンダー



旧河澄家の自然

蓮の果托でつくる小さな手しごと

蓮 *Nelumbo nucifera*, 英名 Lotus

ハス科ハス属 多年生水生植物

夏の水面からずっと茎を伸ばし、大きな葉の間に漂とした花を咲かせます。今年も日下の蓮池に美しく咲き誇り、旧河澄家でも三輪の花が静かに顔をのぞかせました。

花が終わると現れる果托(かたく)は、乾かして葛らしにそっと寄り添う道具へと生まれ



黒紙から茶托（コースター）へ

変わります。

茶托やコースター、鍋敷きとして、手に触れるたびに運の余韻と、手しごとの温もりが感じられます。作り方も簡単で、水に浸して柔らかくしたら平らな板や本で挟み重しを置くだけ。季節の余韻を暮らしにそっと取り入れる小さな手しごとです。

展示・イベントのご案内



展示・イベント

「上田秋成と煎茶道具展」

2025年8月23(金)～2025年9月23日(祝)

文学講座

「上田秋成と頼山陽」

2025年9月7日(日)

文学講座

「石切劔箭神社祭神と富雄丸山古墳」

2025年9月21日 (日)

古代体験会 協力：大阪府立近つ飛鳥博物館

「はにわを作ろう！」

2025年9月23日(祝)

※休館日・開場時間等はP12「イベントカレンダー」にてご確認ください。

旧河澄家の民具



捨てられた古道具に宿った付喪神が悪戯の相談をする様子
『付喪神絵巻』国立国会図書館デジタルコレクションより



行灯 (あんどん)



石油ランプ



『昔の道具展』あかりの展示全体



弓張提灯



箱提灯



燈籠

旧河澄家には江戸時代に代々目下村庄屋を務めた河澄家から寄贈された約千二百点の民具(昔の道具類)が所蔵されており、江戸時代に建てられたとされるこの土蔵で毎年少しずつテーマを入れ替えながらそれらの民具類を紹介しています。

今年度は展示内容を更新し「灯りの道具」を展示していますので、灯りの歴史を辿りながらこれらの道具を見て頂けたらと思います。

「灯りの歴史」

人類が火を利用し始めたのは考古学上では40万年〜50万年前のことだとされ、最初は自然の営みである落雷や火山の噴火、また森林の樹木の摩擦でおこった山火事などで「火」の存在を知り、その発火法を発見してきました。そして人類は火を灯りとして利用するために松など燃えやすい木を使つて松明(たいまつ)や篝火(かがりび)として利用し始めました。

次に発見した灯りの火を効率よく燃やし続けるために燃料となる油が使われ始めました。油はすでに朝鮮との交易があった三、四世紀の頃に使用されていたとのことですが、当時はまだ魚

油など動物性の油で、日本で菜種油や桐油など植物油が製造され出したのは九世紀頃といわれています。これらの油を石や金属で作られた油皿に注ぎ布製の芯を用いて火を灯していました。灯りの道具としては油皿を風除けで覆った燈籠(とうろう)、雪洞(ぼんぼり)、行燈(あんどん)などが考案されました。蠟燭(ろうそく)は飛鳥時代の始めに仏教伝来とともに日本に伝わったとされていますが、当初は蜜蜂が分泌した蜜(みつろう)を使つた蜜燭で高価な貴重品でした。やがて南北朝時代頃に松の幹から採れる松脂(まつやに)を用いた松脂蠟燭が考案され、さらに室町時代になると漆(うるし)やハゼなどの木蠟(もくろう)を固めて蘭草(いぐさ)を芯とした和蠟燭(わろうそく)が登場します。蠟燭を携帯用の灯りとして使った手燭(てしよく)や、箱提灯、弓張提灯など様々な形態の提灯(ちようちん)などが登場しました。

明治時代には石油の副産物であるパラフィン(石炭)を固め木綿の芯として作った西洋蠟燭がより安価な灯りとして普及し、石油を燃料にした石油ランプなどが普及して行きました。

「衣食住の道具」

旧河澄家の蔵にはこれまで毎年テーマを変えて展示を行ってきた民具が所蔵されていますが、これらをテーマ毎にコーナーを分けて展示をしています。まず衣食住の衣の分類の中の装身具として化粧道具コーナーでは、手鏡やお歯黒の道具など珍しい道具などが展示されています。食のコーナーには江戸時代に使われていたお膳や茶碗、湯呑、弁当箱などの供膳具と、蒸籠(せいろう)や餅箱、飯櫃(めしびつ)など今ではあまり見られなくなった昔の厨房具を見ることが出来ます。住の分類として文房具や暖房具などもそれぞれの展示コーナーで見ることが出来ます。毎年一月〜三月には小学生が「昔の暮らしと道具」を学ぶ社会見学として当館を訪れ、これらの道具を見てもらうとともに、石臼で豆を挽いたりする昔の道具体験も実施しています。是非ご覧ください。

「展示への想い」

河澄家が所蔵していた資料の内、最古の資料は文禄三年(一五九四)の草香村検地帳(大阪歴史博物館寄託資料)

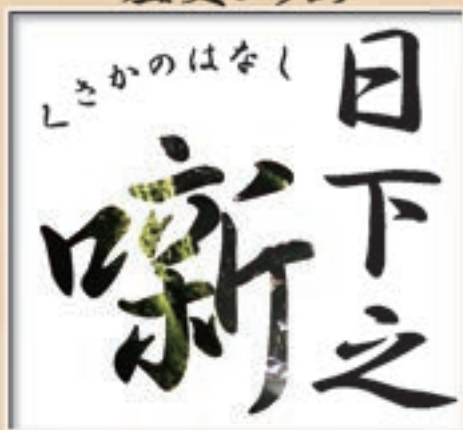


上田秋成作 涼灯

で、当時の村の土地利用や生活の様子を知る貴重な記録です。最も新しい資料は昭和三十五年(一九六〇)の石切宮上様祭に用いられた櫓で、近代においても地域の暮らしと行事が連綿と受け継がれてきたことを示しています。

現在は「化粧道具」「暖房の道具」「食器・膳」など約一五〇点を並び、主屋と江戸蔵に分けて常設展示しています。化粧道具や暖房道具からは当時の生活の工夫が伝わり、食器や膳の一つひとつからは、日々の食卓や季節の行事が思い起こされます。道具は人間の生活の歴史の証に耳を傾けながら、江戸時代から昭和に至る暮らしの連なりを体感していただければ幸いです。

—歴史コラム—



豊かな自然と文化の街、日下
生駒山麓～日下地域、河澄家の
過去から現在に至るまでのおはなし

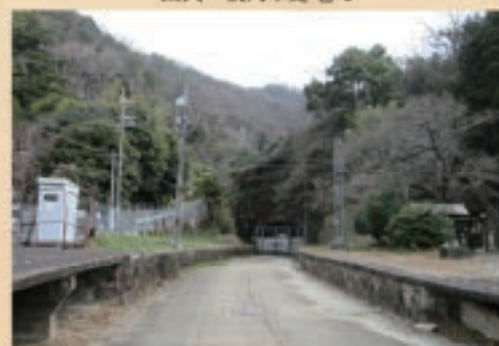
旧孔舎衛坂駅跡と旧生駒トンネル

近鉄奈良線石切駅で北側の改札口を西に出て北へ進み丁字路を右に行くと、旧孔舎衛坂駅跡（きゅうくさえざかえきあと）に出ます。線路はありませんが、孔舎衛坂駅当時のプラットホームが上り下りともそのまま残されています。大正三年（一九一四年）四月十八日に大阪電気軌道（現在の近鉄奈良線）が開通した三カ月後の七月に「日下（くさか）駅」ができ、後に大正七年（一九一八年）に「鷺尾（わしお）駅」さらに昭和十五年（一九四〇年）に「孔舎衛坂（くさえざか）駅」に改名されました。昭和十五年は神武天皇が即位してから二六〇〇年後の皇紀二六〇〇年にあたり、神武天皇東征の折に大和の豪族長瀬彦（ながすねひこ）と生駒西園のこの地で戦った「孔舎衛坂（くさえざか）の戦い」に因み、そしてこの地

定している環境特性を生かして、日本酒やワインなど酒造メーカー等の生産者に熟成行程等の生産場所として旧生駒トンネル貯蔵場所（入口から約五百メートルの横坑）を提供し、生産された商品に「生駒隧道（いこますいどう）」という商標を提供するプロジェクトを推進しています。同社生駒隧道プロジェクトホームページによると、本プロジェクトは酒類だけでなく農産物や酵母などの菌や製品の経年変化、トンネル特有の音に響き方や場所などの環境を活かした使い方やアイデアを今後も探求し続けるということで、旧生駒トンネルの歴史や資源を活かした新たな活躍の場を見出そうとしています。



当時の旧生駒トンネルと孔舎衛坂駅
出典：枚岡市史 巻1



現在の旧孔舎衛坂駅跡



現在の旧生駒トンネル



貯蔵場所は入口から約500mの横坑
出展：生駒隧道プロジェクト HP より



開通時代の大軌鉄道
（近鉄編『50年のあゆみ』より）

が神武天皇東征の地として文部省によって比定されたことを記念しての改名でした。

大阪・奈良間を最短距離で結び、生駒山脈を貫通する旧生駒トンネル工事は明治四十三年（一九一〇年）に着工しましたが、このトンネル全長は三三八メートルで当時の日本で中央本線笹子トンネルの四六六メートルに次ぐ二番目の長さで非常な難工事となり、着工以来一年半をかけて資金の大半をつぎ込んでもおお完成せず、大阪電気軌道株式会社は資金難に陥りました。そのうえ大正二年（一九一三年）一月にはトンネル工事現場で岩盤が崩落し、監督以下一五〇名以上が生き埋めになり、二十人以上の犠牲者を出すという一大惨事が起こりました。

このような様々な困難を乗り越えて、大正三年（一九一四年）四月十八日、生駒トンネルはついに完成し、四月三十日の午前五時に最初の電車が大阪上本町駅を発車しましたが、評判の生駒トンネルを見ようと電車は見物客で満員になったといわれています。昭和三十九年（一九六四年）七月に断面が大きく大型車両が通行できる新生駒トンネルが開通（かいさく）されるまでの五〇年間、大阪と奈良を結ぶ交通の大動脈として活躍し続けることになりました。

新生駒トンネルの開通により旧生駒トンネルに列車が通ることは無くなりましたが、現在でも開通当時の趣を残しており、平成二十二年（二〇一〇年）に経済産業省より「近代化産業遺産」に認定されました。また近畿日本鉄道株式会社／株式会社アド近鉄は、旧生駒トンネルの気温湿度が年間を通じて平均一六・七度、約九八％と安



旧河澄家HP
イベント情報

旧河澄家HPイベント情報ページ→ <http://www.kyu-kawazumike.jp/eventinfo/>
Facebook情報ページ→ <https://www.facebook.com/kyukawazumike>
Twitter情報ページ→ https://twitter.com/kyu_kawazumike
Instagram情報ページ→ https://www.instagram.com/kyu_kawazumike/

旧河澄家にて開催しましたイベントと展示のご報告。
地域の方々と触れ合いながら様々な催しを致しました。
詳しいイベント情報はホームページにも掲載中です。

Kawazumi Report

雛祭り茶会&

箏曲コンサート

一〇二五年三月一日(土) 開催

桃の節句の季節に因んで、旧河澄家では日新高校茶道部の皆さんがお茶を点てていただいた後に、琴部による琴演奏を鑑賞するイベントを開催いたしました。当日は小学生以上を対象に一堂、二席共に各十人の参加者で行われました。お茶会では居間の炉を使って茶釜に湯を沸かし日新高校茶道部員が茶席でお茶を点てる(たてる)お点前(おてまえ)が披露され、参加者は点ててもらった抹茶をお菓子とともにいただきました。そのあと隣の部屋では日新高校琴部による「花かげ」と「花かげ変奏曲」という二曲の琴演奏が披露されました。参加者は、「お抹茶とても美味しかったです。お茶を点てる方の仕草が美しく見えました。」「お琴は普段なかなか聴く機会が無いのですが、良いものだと感じました。」「お雛様とともに今年一服いただけることを楽しみに待っていました。お茶もお琴も素晴らしい演奏風景 主屋にて



茶道部のお点前



琴部の演奏風景 主屋にて

らしかったです。日本文化の伝統を感じることでできました。」ということで、江戸時代に建てられたこの古民家で日本古来のお茶とお琴を同時に体験できる貴重な機会となりました。

春季ハイキング

日下周辺の春日神社三社を巡る

一〇二五年四月六日(日) 開催

川向章介氏のガイドにより毎年実施している春季ハイキングが開催され、今年は日下町周辺の春日神社三社を巡りました。日下町周辺には池之端春日神社・善根寺春日神社・布市春日神社の三社があり、江戸時代から各地域の信仰を集めています。この中で池之端春日神社と布市春日神社は、明治五年に明治政府の河内国合社政策により石切御新神社に合祀されて廃絶の憂き目を見ましたが、その後それぞれ住民の強い請願によって明治十三年には復社して現在に至ります。各神社の周辺にある足立家屋敷跡、向井家住宅、安岡正篤氏旧宅、クジラの骨出土地や日下貝塚などの史跡にも足を止めて、ガイドの川向氏による由緒や歴史に関する説明に耳を傾け、郷土の歴史と文化を学びました。参加者達は近くに住んでいても分かり易い説明で改めてとても勉強になったということで、地元の歴史を再認識する機会となりました。

端午の節句展

一〇二五年四月十九日(土)

五月六日(祝) 開催

今年も「端午の節句展」を開催しました。会場では鯉のぼり、節句のぼり、五月人形、旧河澄家に伝わる鎧兜等を見ることができ、特に今回は古くから地域に伝わる「節句幟(のぼり)」2旗(りゅう)(豊臣秀吉と戦国三英傑(信長・秀吉・家康))を展示しました。「節句のぼり」は端午の節句に掲揚(けいよう)する幟旗(のぼりばた)類の総称で、江戸時代初期から武家の家で端午の節句の外飾りとして屋外に立て並べて、男の子の健康・出世を祝い願うようになったものです。江戸時代中期以降は庶民にも広がり、浮世絵版画の発達と武者絵の流行を背景に祝賀と祈願を表す様々な絵を描いたのぼりが主流となり、鍾馗(しょうき)や豊臣秀吉、加藤清正、上杉謙信、武田信玄など武士・武人などが多く用いられていました。現代ではほとんど見られなくなりましたが、地域にわずかにのこされたこれらの「節句のぼり」から古き日本の風習を顧みることが出来ます。



勇壮な節句幟の展示風景
ナンドにて



主屋にて古文書講座の様子



古文書を優しく読み解く
講師 西田 敬之氏

古文書講座 全三回

一〇二五年六月七日(土)

六月二十一日(土) 七月五日(土) 開催

江戸時代に記された資料を題材にして、古文書読解の基礎を学ぶ全三回の講座が、阪南大学非常勤講師西田敬之(たかし)氏を講師にお迎えして開催されました。今回題材として用いた文書は、江戸時代の「日常書状宝」(季節の挨拶状例文集)の中から七夕祝儀状と、河州河内郡日下村から慶応二年(一九六六年)一月に提出された「御取締御請書」からの写しで、江戸時代末期の公式文書を読み解く基礎を学ぶとともに、村の治安維持のため幕府が取り締まりを強化していた様子をうかがい知ることが出来ます。参加者の中には古文書を読むのが初めての方も多く、「初体験で楽しく学ぶことができました。」「難しいですが楽しいです。昔の人の学識に改めて感心しました。」「などと、古文書を学ぶことへの興味や関心・期待感が多く寄せられた催しとなりました。

古民家で土に触れる

おとなの陶芸教室

一〇二五年四月十六日(水)

七月三日(水) 開催

石切工房桜樹庵桜井智子氏指導により四月十六日(水)から全六回の陶芸教室が開催されました。平日開催で成人を対象としたこの教室では桜井講師の指導の下で、「抹茶茶盞」、「花瓶」、「もみじの小皿」、「箸置き」の四作品を制作するプログラムが組まれ、五回目までは粘土をこねて手回しろくろなどの道具を使って四作品を順次作陶した上で、最終日には石切工房にて四作品まとめて釉薬(ゆうやく)「ゆうやくすり」をかける作業を行います。釉薬をかけた作品は石切工房の窯で焼成した後、約一か月後に参加者に引き渡されます。参加者からは、趣きのあるこの古民家で、以前からやってみたいと思っていた陶芸をすることが出来て良かった、丁寧に分かり易く教えていただき楽しんで参加できた、焼き上がりが楽しみ、という声をいただき、非日常を楽しくしながら体験できる催しとなりました。



土の湿もりに触れる



釉薬をかけた
仕上げの4作品

峰滝ゼミ



できたての香り広がる
かまど炊き込みご飯!

カマドで炊き込みご飯

今回は、みんなで炊き込みご飯を作るイベントを開催しました。材料を切るころからスタートし、包丁を初めて持つ子どもから、ベテランの方まで、世代を超えての共同作業。教え合ったり褒め合ったり、自然と笑顔があふれる素敵な時間になりました。かまどに火を入れるのも一苦労でなかなか火がつかず、担当の方とあれこれ試行錯誤し、ようやく炎と煙があがった時には、思わず「おおー」という歓声が響き渡りました。炊き上がったご飯の香りに包まれての実食タイムでは、「おいしい!」とおかわりするお子様もたくさん。釜が空になるのを見て、開催して本当によかったと感じました。

デジタルが当たり前の今だからこそ、アナログな暮らしに触れる

この機会は、世代を超えた交流と学びに満ちた、かけがえのないひとときとなりました。



子どもたちの
まな板の音が響きます

浮世絵展

浮世絵にみる
風景と暮らし



中山道六十九次宿場図

二〇二五年五月十日(土)〜六月八日(日)の期間で「浮世絵展」を開催しました。この企画展示では一級建築士で河内いへ・まち再生会議の理事長小原公輝氏による、浮世絵師歌川広重(うたがわひろしげ)と淡斎英泉(けいさいいへいせん)が描いた「木曾街道六拾九次」の各宿場の風景と、そこに描かれた建物や人々の暮らしをめぐりに関する解説パネルの展示が行われました。本展示会を開催するきっかけとなったのは、小原氏が江戸時代には隆盛であった古民家を見守っていた際に、事情によりその古民家が余儀なく解体されることになり、その本棚にあった書籍「浮世絵体系」全十七巻が見つかり引き取るようになった事でした。貴重な書籍であり、より多くの人に見ていただきたく、それぞれに解説を付けて展示することになりました。中でも「木曾街道六拾九次」(中山道六十九次)は、江戸時代の宿場町そのものが今でも数多く現存しており、浮世絵に描かれた風景と比較しながら庶民の生活ぶりを、眺めることができる街道です。小原氏は「浮世絵師広重と英泉によって描かれた絵には、二人の絵師が一回きりの旅で出会った江戸時代の風土と暮らしの営みが描かれ、彼らが当時触れ合う思いを胸に描いてい

たのでは、ということを感じてもらえたらうれしいです。江戸時代の自分になった気持ちになって鑑賞してください。」と語っています。

講演 浮世絵にみる風景と暮らし

二〇二五年五月十一日(日)開催

浮世絵展の展示期間中の五月十一日(日)に河内いへ・まち再生会議の理事長小原公輝氏を講師にお招きして「浮世絵にみる風景と暮らし」をテーマとした講演会を開催しました。本講演ではスライドで中山道六十九次の浮世絵一枚一枚をスライドで鑑賞しながら、広重と英泉という二人の浮世絵師の構図や色の使い方、雨の表現技法などの特徴や、描かれた建物や橋などの建築物に関する建築学的な説明、更には浮世絵に描かれた人物の表情や動作などに、興味深い解説を数多く聴くことができました。参加者からは「広重と英泉の違いが良く分かった」「中山道を旅した気分になりました」「浮世絵の風景や暮らしを存分に味わう良い機会となりました」。



浮世絵展 展示風景
シモダイドコにて



講演「浮世絵にみる風景と暮らし」
主屋にて



講師 小原公輝氏

やさしい暮らし 昔にならう

祭礼を通して
現代(いま)を見る



三本の大幣夏季大祭(平成28年撮影)

例年八月四日は氏神様の石切創箭神社夏季大祭で、本年は旧河澄家があらる日下が「昇番(かきばん)」でした。夏季大祭は江戸時代初期に始まった疫病を祓うためのお祭り、神社からは神輿と三休の大幣が、氏子地区からは太鼓台を出して練り歩きます。

大幣とは、7mある丸太に白布を巻き付け、先端に三面の扇と御幣(ごへい)を括り、根本に新米と紙片が入った布袋を付けて調製した物で「おおへい」「おいため」と呼びます。この大幣は地区内を練り歩いた後、神社本殿の前で、青年団の掛け声とともに大幣を揺らせ振る大幣神事が斎行されます。

今回はこの大幣神事に注目したいと思います。

万葉集巻五には「遠つ人松浦佐用姫(まつら さよひめ) 夫恋(つまこひ)に 領巾(ひれ) 振りしより負へる山の名」(よみびと知らず)と歌われています。これは、佐賀県唐津市に伝わり、松浦佐用姫が朝鮮半島に出征する恋人を見送る歌です。

この歌を現代風にとらえれば、領巾(ハンカチ状の布)を振って別れを惜しむ様子を想像致します。しかし、古代の「振る」とは呪術的な要素があり、衰えた魂が再生されるという信仰がありました。万葉集や記紀神話にはこの「袖を振る」「領巾を振る」例が登場致します。旅立つ人には、魂振りの呪力が相手に届き健康と無事を祈り、また恋しい人の魂を呼び寄せる力もあると信じられていました。この歌の「領巾を振る」とは単に別れを惜しむのみで

はなく、戦地に赴く恋人の無事を祈るという呪術でもあると云えます。

また、石切創箭神社のご祭神、饒速日尊は、地上に天降られる時、天津神から呪法が授けられ「もし痛む所あれば、十種瑞宝(とくさのみづのたから)を、ゆらゆらと振りなさい。そうすれば死(まか)りし人も生き返るほどの力を得られ、これを布留(ふる)の起源とする」と伝えられています。(『先代旧事本紀(せんだいくじほんぎ)』巻三 天神本紀)

※『先代旧事本紀』物部氏の事績を多く載せている。古事記・日本書紀には見られない「古い痕跡」が残されている。

石切創箭神社夏季大祭、大幣神事は振る(布留)事により石切の神の霊力が増幅され、疫病が祓われ人々の幸せを祈る古代祭祀の跡を見て取る事ができます。太鼓台とはまた違った良さがあり、これもまた大切な神事と云えます。

医療が発達していない時代に目には見えない疫病により身近な人が次々と亡くなっていくが、どうする事も出来ず、にただ祈りを込めていた当時の人々の心が思い浮かびます。



氏子地区を巡る大幣
(夏季大祭 令和元年撮影)



大幣神事
夏季大祭(令和元年撮影)



鳥居前で大幣を揺らせる
夏季大祭(令和元年撮影 協力:H様)



2025 年 9 月~

旧河澄家 イベントカレンダー

河童は、池や田に自生する水草で、古くは魔物の毒や武器の材料として用いられてきた。葉の形が矢に似ることから、別名「箭毒草」とも呼ばれ、武家の家紋として人気がありました。

※イベント日程は本誌発行時の予定ですので、都合により多少前後する可能性がございます。詳しくはお問合せください。

上田秋成と煎茶道具展

8/22 (金)
~ 9/23 (祝)



本展では、江戸時代後期の作家・歌人、上田秋成による代表作『雨月物語』の世界をはじめ、煎茶文化にも親しみ、茶の風趣や文人としての暮らしの様子に触れることができます。煎茶道具の他、秋成が詠んだ和歌を記した懐紙や短冊帖などの資料を紹介し、文学と茶の時間、日常の美意識をあわせて感じていただけたらと思います。

見字無料

郷土の歴史講座 石切劔箭神社祭神と富雄丸山古墳

9/21 (日)



東大阪文化財を学ぶ会 会長南光弘氏をお招きし物部氏の盛衰や、蛇行剣・屈形銅鏡が出土した富雄丸山古墳の被葬者像等についてお話しいただきます。物部氏とは古代大豪族で、その祖先神は饒速日尊。土主神、石切姫神社ご祭神です。殊に本年の夏季大祭の昇遷は旧河湊家のある日下でした。稚古原今とは『古事記序文』よりの言説。いつ学ぶ？会費！と、お楽しみ下さい。

參加展銷

古代体験会 はにわを作ろう！

9/23 (祝)



大阪府立近つ飛鳥博物館のご協力により、古墳時代のはにわづくりを歴史ある古民家で体験いただきます。土に触れ、かたちを生み出す時間は、まるで古代ヘタイスリップするひととき、自作のはにわを通して古代の祈りや暮らしを感じてみませんか。

參加費 100 円



論語の素読会

每月
第2・第4
土曜



素読は、江戸時代の寺子屋で活用されていた学習方法でした。素読で読む文書として中国の古典『四書』がよく使われています。その中のひとつに『論語』があります。『論語』は、孔子とその弟子の中でも優れた人物たちの言葉をまとめた書物で、心を打つ章句が詰まっています。古来から大切にされてきた生き方や考え方を学びませんか。

參加無辜

壹拾玖萬玖千零陸拾

東大阪市指定文化財 旧河澄家

見字體表

所在地 平579-8903 大阪府東大阪市日下町7丁目6-39
電話番号 TEL/FAX 072-984-1640
ホームページ <http://www.kyu-kawanizaka.jp>
開館時間 午前9時30分～午後4時30分
休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）
入館料 祝日の翌日・12月29日～1月3日
駐車場 無料
5台（無料）
満車の場合は、近鉄けいはん線「新石切駅」
周辺の有料駐車場をご利用ください。

◆アクセス方法

公共交通機関をご利用の場合

- ・近鉄奈良線「石切駅」より北西へ1.2km
- ・近鉄けいはんな線「新石切駅」より北東へ2km
- ・近鉄奈良線「東花園駅」または近鉄けいはんな線「新石切駅」より、近鉄バス「四条堀行き」または「住道行き」に乗車「南日下」バス停より東へ800m
- ・JR 宇都都市線「住道駅」または「四条堀駅」より、近鉄バス「東花園駅前行き」に乗車「南日下」バス停より徒歩約15分

マイカーをご利用の場合

- ・旧国道170号線「目下4丁目」交差点を東へ、約600m直進

◆指定管理者 株式会社アズウェル TEL: 072-939-7861
FAX: 072-952-4340

URL: <http://www.asuwell.co.jp>
E-mail: mail@asuwell.co.jp



株式会社アスウェルは、総合ビルメンテナンス会社として、次の業態を取扱っています。



JSQ14001:2015/ISO9001:2015 / 企業標準
 JSQ14001:2015/ISO14001:2015 / 企業標準
 ・ 環境安全情報安全管理
 ・ 設備保全管理
 ・ 建築衛生管理
 ・ 人材育成
 ・ 業務改善
 ・ 安全管理

